

平成29年度 日本大学スポーツ科学部個人研究費 研究実績報告書

所属: スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格: 准教授

氏名: 秋葉 倫史

研究課題		文法化現象としての完了形の発達
報告の概要	研究目的 及び 研究概要	<p>研究目的 本研究では、通時的コーパス等の当時の実際の言語資料を基に、完了形の例文を採取し、その数量の変遷や例文自体の内容を詳細に検証することによって、完了形の通時的変遷を記述的に示し、その変遷が言語変化を説明する理論である文法化の流れに沿った変化であることを考察することを目的とする。</p> <p>研究概要 ① Penn Parsed Corpora of Historical English 等の通時的コーパス及び聖書等の実際の文献を資料として、完了構文の例の収集・分析を行う。 ② 文法化理論の方向性を示す基礎研究として、より近代で生じた他の文法項目を検証する。 ③ ①の調査から得た変遷のデータを、②で検証した「文法化」理論の観点から検証する。</p>
	研究成果	<p>① 言語資料のデータより、OEでは完了形の用法はまだ完全に普及しておらず、ME初期からその用法を一般化させ、EModE以降にさらに用法を拡張させたことを示した。 ② 文法化の理論を示す基礎調査として、近現代にみられ、Hopper and Traugott (2003) 等で説明される be going to の変遷を確認した。COHA・BNC 等の近現代のコーパスを用いて、be going to の変遷を示し、1850年代以降この構造が一般化したこと、及び意志未来・単純未来の意味の拡張、gonna の短縮形の出現の時期と文脈も言及し、これらの変化が語彙範疇から機能範疇へ移行する文法化の説明に沿ったものであることを実証した。 ③ 完了形のデータの変遷は、全体的には文法化の流れに沿ったものであることを示した。ただし、初期のデータ量が少ないため、今後、OE以前のゴート語等の対応する表現との関連を調査する必要があることも示唆した。 上記②の内容をまとめ、日本大学英文学会英文学論叢に投稿し、2018年3月に掲載予定である。</p>
研究業績	・論文および著書  著者名・論文標題・雑誌名・査読の有無・巻・発行年・ページ数	論文:秋葉倫史・「近代・現代英語コーパスから見る be going to の変遷」・日本大学英文学会 英文学論叢・査読あり、第66巻、2018年。
	・学会発表等 発表者名・発表標題・学会名・発表年月日・発表場所	なし
	・その他  *学会・競技団体報告書など 著書名・標題・掲載誌名 発表年月・発行所 *講演会、研究会、研修会、セミナー等での講演発表 発表者・発表年月・題目名・講演会名 *社会貢献活動等	なし